



かたるみえ LuMie Night 2021

三重町市場通り活性化のための光環境改善ワークショップ

はじめに

「夜の街が暗く、寂しい…」豊後大野市から通う学生のこの想いがプロジェクトのきっかけとなりました。話を聞くと、地元では街に活気がなく、夜は出歩く人も少ないため、帰り道に不安を抱いており、これをなんとかしたいとのことでした。以前よりお付き合いのあった豊後大野市でまちおこし活動をされている里の旅公社の赤嶺様にご相談したところ、ご協力いただけることになり、三重町市場通りをフィールドとしたプロジェクトがスタートしました。

夜の街歩き調査や、明るさの測定調査を通じて、「暗さ」の改善には新たな形の街路灯が必要であることが見えてきました。同時に「寂しさ」の改善には、地域の方に関心を持っていただき、地域ぐるみで街を元気にする方策についても考えていく必要があることがわかりました。このような経緯から、本プロジェクトはハード（街路灯）の整備だけでなく、ソフト（心）の活性化も含めた取り組みとなりました。ちょうどその頃、里の旅公社の三浦様が「市場通り活性化実行委員会」を立ち上げられ、2021年10月24日にまちおこしのイベントを企画されており、その夜の部を日本文理大学で担当させて頂けることになりました。

具体的な活動内容についてはこの冊子でご紹介する通りですが、このプロジェクトによって“3つのきっかけ”を得ることができたと感じています。

一つ目は、地域に長く住まわれている方の意識の変化のきっかけです。ワークショップやイベントでは、様々な場面で地域の方々にご協力いただきました。我々を温かく受け入れてくださった上に、「街を見つめ直すきっかけとなった」「また来年も開催しましょう」などの前向きなお言葉をいただきました。特にイベントで実施した、かつてその場所にあった屋号を再現する「屋号提灯」は懐かしく、会話のきっかけとなり大変好評であったと後でお聞きしました。意識の変化はアンケート結果にも表れており、活動の継続により今後のさらなる変化が期待されます。

二つ目は、地域の子供の思い出作りのきっかけです。イベント当日に地域の子供達が数多く参加してくれて、目を輝かせて手提げ提灯を持つ姿がとても印象的でした。これから街を担う彼らが地域に楽しい思い出と愛着を持ち、地元を支えたいとなるようなきっかけとなればと思います。

三つ目は、学生の心の成長のきっかけです。大学とは異なる環境で地域の方々より刺激をいただき、社会人としての自覚を高めてくれたように感じます。学生の感想文では「地域の方々が温かく迎えてくださってありがたかった」との意見が多く見られ、感謝の心が芽生え始めています。地域問題に関心を持ち始めた学生もおり、今後の更なる成長に期待しています。未熟な学生を優しく受け入れてくださった地域の方々には、この場を借りて、御礼申し上げます。

今回の取り組みは序章であると考えています。得られたきっかけの火を絶やすことなく、さらなる発展につなげるため、今後も取り組みを継続して参ります。

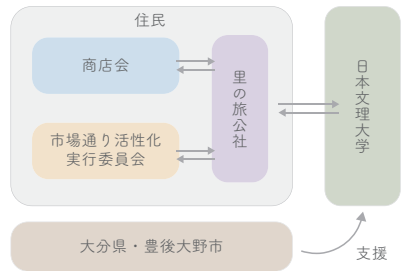
目次

はじめに	1
目次 / 協力者紹介・委員会メンバー	2
対象・目的について	3
事前の光環境調査	4
イベント（かたるみえ・LuMie Night）の準備	5 - 6
イベント（かたるみえ・LuMie Night）の当日	7 - 8
学生の作品（虹の卵・綾のはこ）	9 - 10
イベントにおけるアンケート調査	11
新しい形の街路灯の提案と実験	12
実行委員長より / イベントの名前の由来 / ロゴデザイン	13
おわりに	14

協力者紹介・委員会メンバー

赤嶺 信武 氏	一般社団法人ぶんご大野里の旅公社 専務理事
三浦 絵里奈 氏	企画
桑原 一善 氏	豊後大野市 建設課 都市計画建築係 副主任
佐藤 康宏 氏	係長
近藤 正一	日本文理大学 工学部 建築学科 教授
江越 充	助教

各団体の関係



かたるみえ・LuMie Night 2021 実行委員会

院 生	村田岳彦
4 年 生	若林幸隆 長吉優香 廣瀬右京 堀田健翔 益満光 渡邊尚樹
3 年 生	志方遥郁 八木千尋 小川茉莉 渡邊新 KIM SEUNGHYUN
2 年 生	畑野達也 二見拓希
1 年 生	齋藤志歩 田原乃々花 玉田梨那
協力:	近藤研究室・今西研究室・稲川研究室



そのほか、近隣住民の皆様、ご協力下さった皆様に心より感謝申し上げます。

対象

宿場町の面影が残る 豊後大野市三重町市場通り

かつては交通の要衝であり、昭和30年代まで宿場町として栄えたが、近年は交通網の変化や地域住民の高齢化による地域の活力の低下が課題となっている。加えて、空き家・空き地の増加や街路灯の老朽化が進み、街の夜の安全・安心が脅かされている現状にある。



目的

街の夜の安全・安心 + 活気

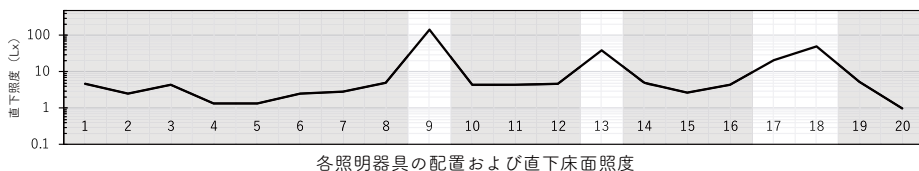
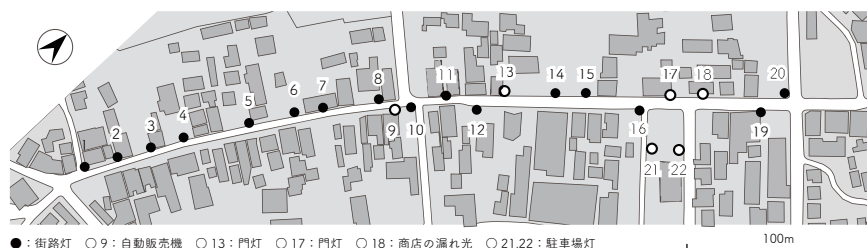
安全・安心の光環境の創出、愛着・誇りを持てる夜の景観づくりを目指し、地域住民に関心を持って頂くためのきっかけとして、光に関するワークショップを開催した。



普段の市場通りの風景

明るさの分布調査

街路は夜間、**歩行帰宅者が安心安全に通行できる光環境であること**が大切とされている。しかしながら、街路灯の整備状態や街路の形状の影響でこの機能を十分に果たせていない街路も多い。今回対象とした三重町市場通りも例外ではなく、光環境の改善が望まれる。まずは現状を把握するため、明るさ(床面照度)の測定と、目視による問題点の調査を行った。



明暗差の大きい、暗い街路

調査結果として以下のことが分かった。

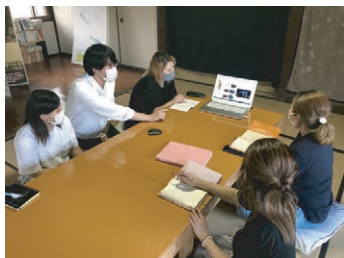
- ・ 照度が高いのは街路灯直下ではなく、路肩の自動販売機や商店の光であった
- ・ 暗い街路の中に強い光として存在しているため、暗い部分と明るい部分暗明差が激しくなる
- ・ グレアなどの光害や暗い部分が強調され不安感がより強くなるといった点が懸念される



防犯性と地域性を兼ね備え、以前の宿場町としての**活気を取り戻す街路灯**の提案を行う

イベント（かたるみえ・LuMie Night）の準備

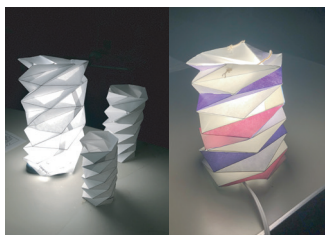
イベント実行委員会立ち上げ



8月



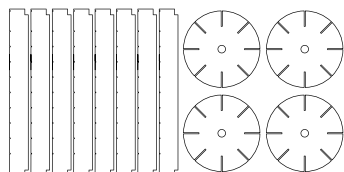
屋号提灯のプロトタイプ



手提げ提灯の試作



屋号提灯の量産型決定



屋号提灯の型の作成



牛乳パックランタンの試作



キャンドルアートの実験



10月



屋号提灯約 80 個 生産完了～積み込み



キャンドルアートの試験点灯

イベント（かたるみえ・LuMie Night）の当日



AM 9:00



ランタン作りのワークショップを開催



かつての屋号を記した提灯が街を彩った



PM 9:00



完成したキャンドルアートがイベントの最後を飾った（モチーフ：虹澗橋）

虹の卵

大学院 村田岳彦 + NBU 建築学科 1 年生



卵には物事の原点、始まりの象徴という意味を持たせました。
殻を破って生まれた仄かな光は、豊後大野がこれからより発展していくための種火です。
豊後大野の七つの都市を虹と例え、新たな催しが産声を上げた様子を表し、これから永く、
広く知られる催しとなるように願いを込めました。

日本文理大学建築学科の一年生たちそれぞれが、卵型灯籠の配色・柄をデザインしました。
(村田 岳彦)

綾のはこ

大学院 村田岳彦 + NBU 近藤研究室有志

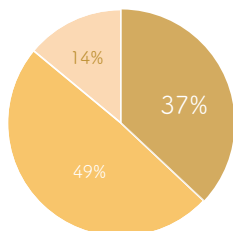
木材で作ったフレームに透明な糸を張り模様を描いた空間を楽しむ作品です。
綾という言葉は、糸や線の交わりという意味だけでなく、人との関わりや文化の交流といった目に見えない現象にも使われます。
三重町市場通りで生まれる小さな綾が、より大きな繋がりとなって、これからの歴史を編んでいってほしいという願いを込めて制作しました。

(村田 岳彦)

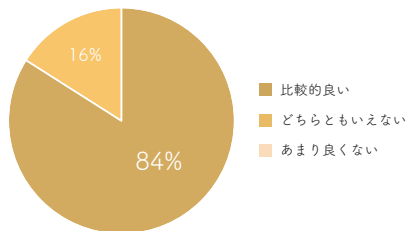


住民の意識の変化：“諦め”から“見直そう”という意識へ

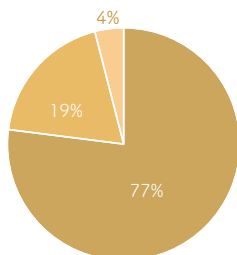
Q. イベント前まではこの地域に対して
どのようなイメージをお持ちでしたか？



Q. イベントを体験後、
この地域に対するイメージを教えてください

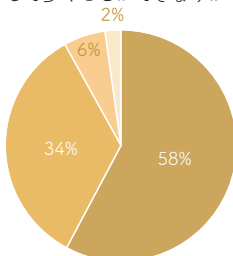


Q. 地域を活性化させるためには、このような町を挙げて行うイベントを
毎年、もしくは定期的に行うべきだと思いますか



■ とてもそう思う ■ どちらとも言えない
■ 比較的那う思う ■ あまり思わない・全く思わない

Q. 普段の市場通りの照明よりも
イベント時の市場通りの灯りの方が
安心して歩くことができますか



■ とてもそう思う ■ どちらとも言えない
■ 比較的那う思う ■ あまり思わない・全く思わない

街の声



40代～50代女性 三重町在住

普段は人通りが無くてさびしいが賑やかで良かった

60代～70代女性 三重町在住

またこのような事をしてほしい



60代～70代女性 三重町在住

昔のようなにぎわいを感じた

60代～70代男性 三重町在住

店を譲る気でしたが、もう少し続けることにした



40代～50代女性 三重町在住

イベント開催で、いつもより街が明るくて嬉しい

60代～70代男性 三重町在住

こんなに賑わっている商店街は久しぶりに見た



60代～70代女性 三重町在住

このまま温かみのある三重町であって欲しい

60代～70代男性 三重町在住

商店街などの人達としかかわる機会を増やしてくれた



「明るさ」重視ではなく、「安心感」の得られる街路灯へ

イベントの際に街に屋号提灯を 80 灯ほど設置し、アンケート調査を行ったところ、安心感が向上したとの回答が全体の約 9 割を占めた（左ページ下グラフ）。明るさの指標である床面照度をイベント中に測定したところ、照度はあまり上がっておらず、安心感の向上には明るさ以外の要素が影響している可能性が示唆された。そこで提灯型の街路灯を提案し、適した配置を検討する実験を行った。

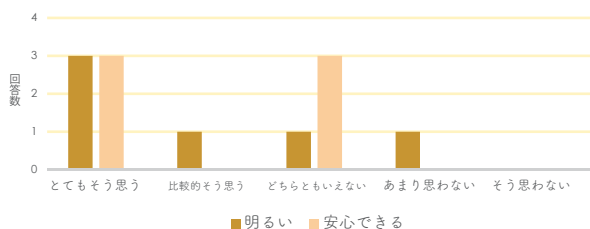


実験に使用した照明器具
(明るさは現在の街路灯の約 1/6)



低い位置に分散配置する照明が地域の方に好評であった

実験のアンケート結果



地域の方 6 名に実験にご参加いただき、アンケートを実施したところ、低い位置に分散配置する照明が明るく感じ、安心感が得られる傾向があった。配置や高さについては様々なご意見を頂いたため、最適な配置については、今後さらに検討を進めていく必要がある。



理想的な街路灯の一例（長吉優香作）

実行委員長より

今回「かたるみえ」において、実行委員長を務めさせていただきました若林です。まずはじめに、「かたるみえ」を開催するにあたって協力・支援していただいた団体、方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

大学として今回のようなイベントは前例がなく初めての取り組みで、不安に駆られたり、思うように事が運ばない中、イベントが成功したことが委員長として、これまでに嬉しかったです。想定していたよりもたくさんの来客数、様々なワークショップを見たりして喜んでいる子供たち、笑顔が溢れているご家族やご夫婦、普段よりずっと賑やかな市場通り、何をとっても嬉しいことばかりでした。大学1、2年生のころから講義でお世話になってきた豊後大野市三重町市場通りで、1つだけ小さなことですが恩返しのできたかなと思います。

現在大学4年生で卒業するため、また大阪府に就職することから、今後の「かたるみえ」を拝見することは難しいですが、これからの発展は気にかけています。継続して行われるのであれば、コロナ禍が続くご時世ではありますが今回よりも更なる盛り上がりを見せるようなイベントになっていただければ、委員長を務めさせていた身としては嬉しい限りです。

最後に、日本文理大学の学生のみで構成された委員会でしたが、地位の高い役柄を務めるのが個人的に苦手で、失敗や苦勞させることが多いなか、最後までついてきてくれた委員会のメンバーにはとても感謝しています。本当にありがとうございました。

日本文理大学 工学部 建築学科 4年 若林 幸隆

イベントの名前の由来 / ロゴデザイン

イベント名「かたるみえ・LuMie Night」の由来

かたるみえ : 仲間に加わるといった意味を持つ方言の「かたる」と、
光をフランス語で表す「ルミエ」、三重町の「みえ」を合わせたもの
LuMie Night : 目に留まる大文字のLとMは「ルミエ」と「みえ」を彷彿とさせる
夜の部も盛り上がりをもせて欲しいとの願いから派生名をつけた

イベントのロゴデザイン

「つな」ぐから横綱のしめ縄をモチーフにしたロゴをデザインしました。彩られた9色は三重町の統合前の村の数を表しており、地域の繋がりが深まってほしいという思いと市場通りが益々賑わい、発展してやまないようにという思いをこめています。
(志方 遥郁)



中心の三つ葉は「三」重町が芽生える様子を表している



当日イベントに来てくださった方に配布したパンフレット

おわりに

守・破・離

千利休の教えをまとめた『利休道歌』に「規矩作法守り尽くして破るとも離るとも本を忘るな」とあります。「守」は基礎を学ぶ段階、「破」は応用の段階、「離」は独立の段階です。師匠の教えに従って修業・鍛錬を積み、自分に合ったより良いと思われる型を模索して試し、さらに鍛錬・修業を重ねて既存の型に囚われることなく型から離れて自在となって、そうして初めて新たな流派が生まれるのです。でも、最後に「本を忘るな」とあり、根源の精神を見失わないようにすることが肝要です。

同じように、どのような地域創生プロジェクトであっても、まずは過去と現在を踏まえなければ未来は描けません。「三重町市場通り活性化のための光環境改善ワークショップ」に参画した学生たちは、まず「守」段階として三重町の在町としての歴史を学び、地域の矜持が何たるかを知るところから取り組みを始めました。その次の「破」段階として、これまでに学んだ専門知識を活かすと同時に必要となる新たな知識を学修しつつ、街路照明の調査・まち歩き・分析を踏まえた現地での打ち合わせ・学生プレゼンテーションを重ね、さらに10月には、まちおこしイベント「かたるみえ・LuMie Night」にて屋号提灯・手提げ提灯・キャンドルアート等のさまざまな試みを実践しました。そして今、「離」段階として実際の街路を使用した照明実験や街路灯のLED化による地球温暖化抑制効果と街路における安心感・親和感の演出等について、地域住民と協働するかたちで考え、調査・実践し、検証する取り組みへと発展させようとしています。

担当する学生たちは、いわば修行中の身であり、これらの一連の取り組みを体験しながら、まさしく文字通りの「守・破・離」を実行している最中です。私ども大学教員としましても、専門家としての役割を果たし、今後も引き続き、若者たちが時折放つ輝きをまぶしく感じながら、地域の皆さまとともに、歴史ある三重町の元気を取り戻せるような活動へと育てていきたいと志を新たにします。

本プロジェクトでは、一般社団法人ふんご大野里の旅公社 専務理事 赤嶺信武氏・三浦絵里奈氏、豊後大野市 建設課 都市計画建築係 副主幹 桑原一善氏・係長 佐藤康宏氏を始め、多くの地域の皆さまのご協力をたまわりながらここまでたどり着くことができました。末筆ながら、この場をお借りして、深く感謝いたします。

日本文理大学 工学部 建築学科 教授 近藤 正一



本イベントは”おおいた地域連携プラットフォーム 実践型地域活動事業”の支援を受けて実施しています。